後発途上国における食糧増産は、カナダの対外援助の大きな柱のひとつである。マラウイで農機の操縦を教えるカナダの農夫。

カナダの二国間援助の中でこうした性格の援助が占める割合は、一九七五年の六パーセントから、八一年には二五パーセントとなり、今後はこれをさらに増やす計画である。

二番目の重点分野は、エネルギーである。現在、カナダの二国間援助総額の約二〇パーセントが、エネルギー関係のプロジェクトで占められている。援助ルートは多々あるが、主として水力発電と森林関係が多い。緊急国際決済機関のペトロカナダ・インターナショナル、あるいはその他いくつかの新設制度などが例としてあげられる。

今日、世界中に二十五億の最貧層の人びとがいる。そのほとんどは農村部に住み、生活に必要なエネルギーの大半を木や作物のかすといった、いわゆる非商業燃料に頼っている。

途上国で行うべきエネルギー関連研究は、したがって非常に難しい課題を含んでいる。現在のエネルギー研究は、ほとんど先進国のニーズに対応したものである。たとえば、従来の研究では、途上国の農村に適した小規模なニーズにすぐ応えられるような研究はほとんど行われていない。再生可能エネルギーにしても、その研究はごく最近始まった分野であり、途上国で活用するにはまだたくさんの問題が解決されなければならない。

カナダ政府の行おうとしている新援助計画のひとつに、途上国のエネルギー研究に対する一千万ドルの援助費増額がある。カナダの国際開発研究センターがこの資金を受けて、精力的な研究計画を組むことになっている。

途上国援助の中で、なぜカナダがエネルギーを重視するか、その理由についてここではただ、最近のオイルショックで途上国が蒙った損害が、北側諸国の開発援助総額を上回る非常に大きなものであった、という事実を指摘するにとどめたい。石油価格の高騰は、最近の高金利と相まって、途上国の経済に壊滅的影響を与えている場合もある。

第三の重点は、人的資源（技能）である。開発を進める上で最も基本的な要因である〝人間〟にもっと注意を向けないと、開発を阻害している状況を打破することができない。このためカナダ国際開発庁（CIDA）などの援助機関は、従来の援助方針を大きく変え、途上国の民間団体への援助を大幅にふやしてきた。要するに開発とは単に経済基盤の建設にとどまらず、経済、人間を含めた総体的な作用によって社会の方向を規定するひとつの方法なのである。

以上でカナダの二国間援助が、基本的に後発途上諸国のニーズに的を絞り、食糧、エネルギー、人的資源の三分野を優先していることがお分かりいただけたと思う。南北対話によって最も恩恵を受けるのはおそらく後発途上国以外の国ぐにであろうが、だからこそ南北対話の成果をいかに後発途上国に及ぼすかが、カナダの課題の一つとなってくる。

南北対話の架け橋に

南北対話とカナダの役割について言えば、カナダの果たすべき役割が確実に存在することは、明らかだと考える。トルドー首相は、早くから南北問題を特に重視してきた。首相の考えによれば、南北対話を措いて南北問題の解決は絶対にありえない。私もその通りだと思う。

カナダ経済のもつ性格、たとえば輸出品の加工度を高めたいという願望などから言って、カナダの関心と途上国の関心とは共通している部分がたくさんある。途上国が今日直面しているのと同じ問題を、われわれはこれまでに数多く経験してきた。

カナダはまた、たとえば、英連邦やフランス語圏（ラ・フランコフォニー）などを通じて、途上国と特別なつながりを保ってきた。同時に、カナダは経済協力開発機構（OECD）の一員であり、先進国首脳会議（サミット）のメンバーでもあり、そしてまた南北問題で同じ志をもつ中進国の会議などにも参加している。カナダは、先進国の利害と途上国の利害のどちらをも等しく理解しうる機会を持っており、したがって両者の〝架け橋〟となる資格が十分あると考える。サンローラン、ピアソン、マーティンの歴代外相が努力してきたカナダ外交の役割が、ここに至ってさらに南北問題にまで拡大したというべきであろう。

最後に、カナダがグローバルな問題で有効な解決を図ろうとすれば、世界的規模における多国間の同意が何としても必要であることを忘れてはならない。多国間方式に代わる道はないし、現在国連で提案されている包括交渉こそ、その具体的方法であると考える。すでに国連では、一次産品、エネルギー、貿易、開発、通貨金融の五分野を対象とした包括交渉を進めることで、大方の合意がなされている。

こうした交渉を進め、成功させることが重要である。もちろん、何をもって成功というかについては、議論の分かれるところである。交渉の手続きや議事日程で合意に達するには、すべての側にそれ相応の妥協が必要となるだろうが、私は今日の国際社会がこの課題に十分応えることができる、と信じている。